

でんでら通信 第百十四号 令和五年十月

坐禅会

十月二十七日(金) 十時に坐禅会を開催します。  
みなさんのご参加をお待ちしております。

反出生主義

今回はちよつと暗くなるお話をします。

妙心寺生活信条の3番目には「生かされている自分を感じし報恩の行を積みましょう」とあります。

私たちは決して自分一人で生きているのではなく、水や空気の自然の恵みあるいは、乳児や子供のころは親や周囲がそれこそ身を削って面倒をみてくれたおかげで生かされ、大きくなってきたのです。決して一人の力で育ってきたわけではないのです。

だから感謝してその恩に報いる日々過ごしましょう、という話は、一度は耳にされていることでしょう。

しかしそれが、信じがたい考え方が今、注目されているのを存じてでしょうか。

「全ての人間は生まれてこない方がいいし、全ての人間は産むべきではないという思想」反出生主義といえます。哲学の世界では2千年以上前からこの考え方があったようです。古代ギリシャでは「生れてこないのが一番いい」古代インドでは「生れることは苦しみだ」という思想がありました。現にお釈迦さまも「生きることは苦に満ちている」ととらえ、「いかに苦しみに振り回されず、安らかに生きるか」をテーマとして仏教を開きました。

一般社会では、これまで出産はほぼ肯定的に捉えられ、「めでたい」「お祝いだ」と喜ばれてきました。

しかし今の世の中、生きていることがそんなに素晴らしいことなのでしょうか。

中日新聞7月12日付の記事で女性(35才)が「生まれない方が幸せで、子どもを持ちたいとは思わない。そんな考えをどう思いますか」という問いを投げかけました。それに対し読者から150件を超える助言や意見が寄せられたそうです。この女性はどうしてこのように考えるに至ったのでしょうか。

女性は、「日常の生活に嫌気が差し、無の状態が心地いい」と話します。「両親に愛されていると思えたことがない」といい、「趣味での感動はあるが、喜びも苦痛もない方が魅力的だ」と話します。子どもは産まないのが私の愛情と考えるが、恋人との結婚の話があり心が揺れているといいます。

女性への共感もあれば、産んで子どもとの関係に悩んでいる方、また励ましもあつたそうです。

共感者の中には、父親がギャンブル依存、母親には無視されて育ってきた。「こんなことは私で最後にしたい」と考え、子どもは持たないと決めたといいます。

また出産された方からは、「両親が不仲で、幼いころから「無」でいたいと思っていたが、孤独でいる勇気がなく結婚し、夫やその家族の手前、子どもを持たないという選択もできずに出産、そうした思いは話したことはない。今回向きでない思いを女性が伝えてくれ掲載されてありがたかった。人知れず悩む人は多いと思う」

別の方は「幼いころから無気力で自分を卑下することが多く、子どもが苦しむことになるのに産むのは自分勝手」と感じていたという。

また別の女性は、アルコール依存症の父が母を殴る家庭で育った。「子どもが将来どんな苦勞をするかは分からず、子を産むのは親のエゴ」と感じ、出産した人には「おめでとう」と声をかけるが「かわいそうに、また犠牲者が生まれたと感じる。自分は産まないし、できれば他人にも産んでほしくない。それが一番の正解だと思う」という。

50代の女性は息子が15才の頃「まともに育てられないのに自分たちの快樂のために産んで」と責められた。「僕はなんで生きているの、死んだ方がいいよね」とも。息子の悲しさを知り「つらさや気持ちをできる限り理解しよう、何事も否定せずに聞こう」と考えるに至り、今21才となった息子は引きこもっていて「生きづらいのに、生きていてほしい、と思うのも私のエゴ」と思う気持ちがあるという。

いろいろな意見があります。当事者でないことからいえることもありません。ただどんな生物も子孫を遺す、という繁殖を何に命ぜられることなく繰り返してきて現在に至っています。反出生主義の思想は、現代のような文明が発達した人間社会だからこそ生まれてきたのかもしれない。生きていることがつらければ、生まれてこない方がよかつたと思うのは当たり前。切ない話ですが、反出生主義が受け入れられやすい世の中になつてしまったのかもしれない。生活信条の「生かされている自分に感謝」というのは自分が、今、不幸ではないからいえるのかもしれない。